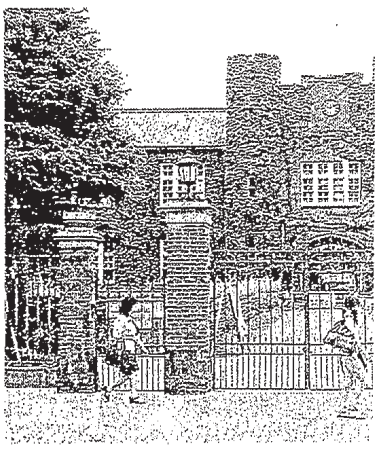
H15.9.5
西日本新聞
（第3種郵便物認可）

（伊吹郷訳「空と風と星と詩 尹東柱全詩集」影書房）

尹東柱はこの詩を一九四二年六月三日に書いた。立教大学英文科の選科生（聴講生）になって二カ月ほどたったころの作品だ。太平洋戦争は既に首都東京の空を脅かし始めていた。

日本本土初空襲で東京にも攻撃があったのは、尹が立教大学に入学して間もない四月十八日の昼ごろであった。その帰路、私は中近東からインドに立ち寄り、西洋とは違う世界に触れたのがきっかけで、後に、高野山に登り、五年あまりのあいだ修行僧のような生活をしながら山上の大学で密教や仏教芸術を学んだ。弘法大師空海によってもたらされた


尹東柱が1942年に半年余り過ごした東京の立教大学

に、敬げんなクリスチャンだった彼はどんな思いをしただろうか。

■宗教学科の学生と

尹東柱は英文科に在籍したが、むしろ宗教学科の学生との触れ合いが多かったようで、大学に隣接していた聖公会神学院の授業を聴講したり、神学院の教授宅でのお茶の会に出たりしていたという。さらに、その事教練を拒否する意思表示をし、配属将校から特別な目で見られていたらしい」という証言を得ている。

当時の立教大学で軍事教練を拒んで信念を貫いたとすれば、大変な勇気だ。選科生まで軍事教練を受ける義務があったかどうかなど、さらに確かめる必要があるが、配属将校ににらまれて東京に居づらくなったのかもしれない。彼が東京に学ぼうとしていた学生の夢を志半ばで奪ってしまったのだ。

そのような時代の荒波に耐えながら尹東柱が日本で書いた五編の詩を正確に読み解き、平和を希求する彼のメッセージを受け止めたい。そのために私はこれからも、彼の足跡を探し続けようと思っている。

（「尹東柱の故郷をたずねる会」会員）

遥かなる飛天への旅

吉永 邦治

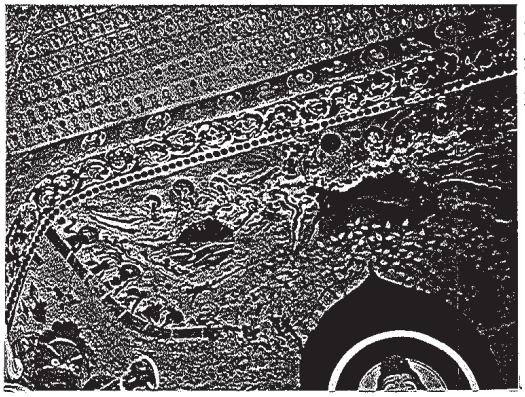
バーミヤン遺跡が世界遺産に登録されたというニュースは、記憶に新しいが、私が訪れた一九七七年頃の、アフガニスタンの印象は、インドやペルシャ、ローマ、ギリシャの文明が流入し、東西が結ばれ、文明の十字路にふさわしい古の雰囲気に満々たる美しい国であった。バーミヤン渓谷の景観も、ポプラの並木が風になびき、コスモスが咲き乱れ、澄んだ空気のなか、ロバの鳴き声がこだまするのんびりとした情景があった。

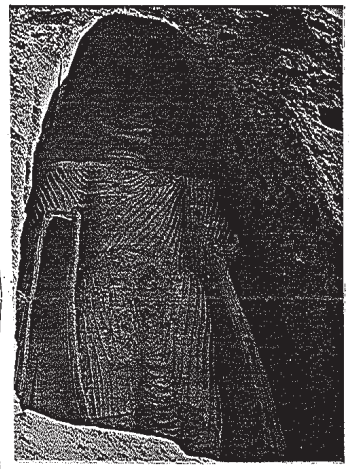
高さ一〇〇㍍の断崖に多くの石窟が掘られ、その中には、塑像や美しい壁画が残されていた。その一角、東側に三十五㍍、西側に五十五㍍という奈良・東大寺の大仏をはるかにこえる巨大な大仏が堂々と静かに佇んでいた。この西側の窟座仏の天井部分に、異なった文化の残影が色濃く反映された天人一体と天女二体からなる飛天がみられた。この飛天は、この地域特有のものであるが、二〇〇一年三月、タリバン政権によって東側の大仏の天井に描かれていた太陽神スーリヤとキンナラとともに同時にすべて粉々に爆破されてしまった。バーミヤンは、中央アジアや中国辺境地域の風土のなかで、飛天が伝播し展開していく軌跡をみるうえで、非常に重要であっただけに残念でならない。

＊

さて、私の心をとらえて離さない飛天に導かれた世界は、若き日、ヨーロッパに旅立った日から始まる。

㊤莫高窟321窟（7世紀）㊦バーミヤン東大仏。天井に太陽神が見える（6～7世紀）





文化の残影 色濃く

秘められた宇宙観にひかれ

曼荼羅などを研究するうちに、その図像のなかに、天空を背景に輝くように描かれた飛天に出合い、その秘められた宇宙観にひかれていった。大学時代から、飛天をもとめてアジア各地への旅をつづけるうち、私自身のなかにアジアの民の心が大きくふくらんでいった。

そもそも飛天は、インドでは、ガンダルヴァと呼ばれ、八部衆のひとつであるインドラ（帝釈天）につきしたがい奉仕している半神である。八部衆は、仏教においては、釈迦の教理を守護し、仏教の精神を底の部分から支える存在である。インドの飛天の姿は、はじめは、単独の男性のような姿であるが、後には、天人、天女が寄り添ったミトウナ形式、すなわちガンダルヴァと配偶者であるアプサラスの飛天一対として表されている。また、ガンダルヴァと同属である小さな翼と長い尾羽で飛翔するキンナラもみられる。

＊

やがて飛天もさまざまな姿やかたちが融合し生まれ変わってシルクロードから中国辺境地へ伝えられていくのであるが、タクラマカン砂漠の西域北路のオアシス都市クチャのキジル石窟やミーランの遺跡では、ギリシャ・ローマ風の天使など翼や天衣とを併せ持つ過渡期の飛天もみられる。また一方、東南アジア方面にも東漸していった。

一九八七年、世界の文化遺産に登録された敦煌の莫高窟には、二百七十窟あまりに四千五百体もの飛天が、五弦琵琶などの楽器をもち、立体感をもたせ描かれている。なかには、ひとつの窟に百五十体もの飛天がみられる。

中国大陸に近づくにつれ、飛天は、神仙、仙人の姿やかたちと融合し、雲に乗って流れるような天衣をまとった細身の飛天が、飛翔するようになる。

大きなうねりをもった飛天の流れは、大陸から直接、また一方、朝鮮半島を経て日本へ翻転してきた。日本の人びとは、金色に輝く仏像とともに飛天の姿に、人智を超越した仏国土があることを知り、その香りや音色をもった飛天、楽天を三重塔の塔婆、寺院の瀧頂幡などに刻みこんだ。奈良、法隆寺金堂壁画などの飛天をみると、当時の画家たちは、霊芝雲には、生気あふれる生命を、天衣には、光輝く太陽光線を、童子形の飛天には、再生をイメージし、不死や長寿、多産を形象化していったように思われる。

日本の各地においては、経典や説話集や物語のなかに飛天が脈々と現在まで伝えられているが、よく知られたもののひとつに「三保松原」の説話がある。

私にとって飛天との出会いは、運命的であるが、これからも魂の心のふるさとを求める遥かなる飛天の旅は続き、命果てるまで描きつづけていきたい。

（鹿児島県出身、画家）

◇吉永邦治展は九日まで、福岡市・天神の大丸アートギャラリーで開催中。

文化

遠景 近景

染色工芸・小川泰彦さん

小川島を幻想的に

海をテーマに染色の仕事を続けています。かつては有明海をテーマにしていましたが、三年ほど前からは玄界灘になっています。小川島の形が好きで、ことしも波戸岬（佐賀県）から見た島の下絵を準備しています。幻想的な表現にしようと考えています。以前はグレー系が多かったのですが、色数が増えました。「若返った」と、言われることもあります。

佐賀大学を定年退官して十一年が過ぎました。七十六歳になります。少しは暇になるのかと思っていましたが、百十五団体が参加している佐賀県文化団体協議会の会長を六年前に引き受けて行事や会合に走り回っています。九月末には、鹿児島市で日展出品の研究会の指導にも出かけます。

（佐賀市、日展会員）

島

地問題の活動化が、普天間基地の名護市辺野古への「移設」（実際には新基地の建設）という形で進行している今、私たちは最初に何があったのかを思い出さなければならないのではないか。そう思うのだ。

ただ、たとえそうであっても、このことについて書くことには暴力性が伴う。そのことを自覚した上で以下のことを書いておきたい。

なぜ兵士と一緒に基地のにおいが輪姦されて警察に保護されたが訴えることはせず、本人のプライバシーを保護するということで記事にできなかった。そういうマスコミ関係者の話を聞いたこともある。

そんな悪い米兵ばかりじゃない。いい人もたくさんいる。確かにその通りだろう。だが、事件は今も起こり続けている。

（小説家、カットは足利桂子さん）

文化短信

▼リコーダーとチェンバロによるバロックと現代の音楽 19日午後6時半、北九州市戸畑区一枝の西日本工業倶楽部。福岡市在住の深井哲男、美登里夫妻によるリコーダーとチェンバロのデュオ。フレスコバルディの「カンツォーナ」、ベルナルディーニャ「コレルリの「ソナタ第4番 長調」、石井真木「東・緑・春」など。入場料3000円。問い合わせは深井さん＝092（714）7922。